

インターンシップの「非対面」プログラム

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、オンラインを活用した「非対面」のインターンシップ（就業体験）プログラムを、島根県内の企業7社と島根大の学生が作成した。各企業と学生間の作成作業はすべてオンラインでやりとりし、内容を構築。オンラインインターンシップは遠方から参加しやすいなどの利点がある。企業からは新型コロナ収束後にも生かせるとの声があり、今後広がりそうだ。

◎月森かな子

オンラインで書籍企画立案 相互の意思疎通図る時間も

新型コロナで全国に緊急事態宣言が発令されていた5月1日、ふるさと島根定住財団は、予定していた「2020夏期しまね学生インターンシップ」の中止を決めた。毎年、学生の夏休みと春休みの時期にそれぞれ開き、同財団が学生、企業ともに募集し、マッチング。夏休みは例年、島根県内企業約100社、県内外の学生約100人が参加するが、今年は感染拡大防止や安

組む「地域共創インターンシップ」の内容を急きよ変更。同財団のインターンシップは

その後、緊急事態宣言の解除などで開催することになったものの、島根大では個別企業

「おやつタイム」の設定

谷口印刷（松江市東長江町）は、例年インターンシップのテーマにしている書籍の企画立案をオンラインで実施することにした。

そもそも同社は新型コロナ会が8月24日、テレビ会議システムを使って開かれた。担当した学生がそれぞれ10分の持ち時間で内容を説明。従来のプログラムをオンライン実施に切り替えたものをはじめ、企業の魅力を発信する動画作成など新しい内容を盛り込んだものまでさまざまだった。

そうした課題を学生に投げかけ、発案があつたのが、企画書作成の時間とは別に、学

生同士や学生と社員が自由にやりとりする「おやつタイム」の設定だった。企画書作成は個人作業で、その間にオンライン上でやりとりするのはは

企業7社と島根大生が作成 コロナ収束後の拡大視野に

「地域共創」内容を変更

これを受け、島根大は2017年度から授業の一環として行い、学生が地域の企業でインターンシップに取り



テレビ会議システムを使って開かれたインターンシッププログラム開発プロジェクトの報告会=松江市西川津町、島根大

完成したプログラムの報告会が8月24日、テレビ会議システムを使って開かれた。担当した学生がそれぞれ10分の持ち時間で内容を説明。従来のプログラムをオンライン実施に切り替えたものをはじめ、企業の魅力を発信する動画作成など新しい内容を盛り込んだものまでさまざまだった。

そうした課題を学生に投げかけ、発案があつたのが、企画書作成の時間とは別に、学

生同士や学生と社員が自由にやりとりする「おやつタイム」の設定だった。企画書作成は個人作業で、その間にオンライン上でやりとりするのはは



今春のインターンシップで書籍の企画立案に当たる参加学生。従来は対面で実施していたが、今夏はオンラインで行う=松江市東長江町、谷口印刷

降続く学生の経験から、企画書作成中はカメラをオンにしたまま音声はオフにする方策の提案を受け、採用した。早速、今月にもこのログラム内容でのインターナンシップ

ばかられるため、あえてコミュニケーションを取る時間をつくり、そこで補うことにした。一方、企画書作成中の緊張

參加企業

- モルツウェル(株)
- (株)バイタルリード
- (株)日本ハイソフト
- (株)コミクリ
- (株)八雲ソフトウェア
- (株)谷口印刷
- カナツ技建工業(株)

「学生の視点重視した中身に
情報交換には適している」

を計画している。

糸川和浩社長は「オンラインの効果は未知数だが、県外などから参加しやすくなるといつた利便性はある。まずはやってみて、出てきた課題を検証し、今後の活用を考えたい」と話した。

現場設置の展示物作成

今回のプログラム作成では、非対面という新しいやり方の提案だけでなく、参加する側の意見を取り入れたいと いう企業も多く見られた。

朝礼にも参加。業務体験はできないが、現場の雰囲気や必要な情報は得られるとした。

さらにオンラインであれば、距離的な問題で行けなかつた県西部の現場に行くことができ、同社

かつた県西部の現場も紹介することができ、同社総務・人事グループの加藤将文主任は「これまで考えたことのなかつた内容。これなら従来のインターネットの枠組みでも使える」と、全てオンラインではなく、対面型に取り入れる形での実施を検討してい

同社のプログラム作成に取り組んだ法文学部社会文化学科の吉岡優希さん（21）は、オンラインのメリット、デメリットを「細かい表情を感じ取ることができず、議論をす

新型コロナを契機に、オンラインを活用する機会は以前と比べて格段に増加した。授業でも使われるようになり、今の学生にとっては当たり前のツールになりつつある。企業側は先を見据え、インター
ンシップ受け入れの手段の一つとして、今から考えておく必要があるのではないか。

交換には適していると思つた」と説明。学生と各企業の担当者は期間中、一度も会つことはなかつたが、いずれも支障はなかつたという。

オンラインで実施する谷口印刷のインターネット シッププログラムの企画書